文学研究会「広州分会」の実像
――機関誌『文学』の発見をめぐって――

裴　亮

一　研究上の空白：文学研究会「広州分会」

文学研究会は、創造社と並び称され、「五・四」文学革新運動の波の中で最初に結成された純文学団体である。一九二〇年代、北京で発足した文学研究会は、組織拡大の方針により、後に上海、広州にも分会を設置し、急速に全国に広がり、新文学の理論の導入、作家の育成及び外国文学の紹介など多岐にわたって文学革新運動の新局面を切り開いた。一九三〇年代から現代に至るまで、文学研究会は中国の文学史家の注目を集めてきた。一方、欧米と日本においても、文学研究会の成立過程を豊富な資料を駆使しながら綿密に考証する論考は枚挙にいとまがない。(一) しかし、これらの先行研究は、文化の中心たる北京の本部と上海の分会だけに注目し、両地域で行われた文学活動を中心に取り上げる傾向がある。文学研究会のような影響力が大きく、複雑極まりない文学団体は、一つの角度からのみではその団体の全貌を一括して論じることができないと考える。

前述のように、北京と上海に止まらず、文学研究会は中国南方の要衝である広州にも分会を設置した。嶺南大学の教師と学生を中心とする広州分会は、結成して間もなく北京や上海と連動して発信し始めた。従来、広州分会に関しては、結社及び機関誌『文学』創刊に関する記事が『小説月報』十四巻八号（一九二三年八月）に掲載されたことによって、その存在が事実として明らかである一方、その詳細な実態については知られていない。このような研究状況下にあって、広州分会結成の経緯や、中心的会員の状況、創作と出版活動及び北京・上海との相互関係などといった基礎的な問題さえまだ解明されていない、もしくは問題提起そのものがなされなかった経緯がある。北京の本部と上海の分会に関する研究と比べれば、「広州分会」という課題は、まさに歴史に忘れ去られたようで、中国近代文学研究の一つの盲点といっても過言ではないだろう。

更に、文学研究会広州分会は、日本近代の著名詩人である草野心平との関係が極めて深いことも注目される。草野心平は、十八歳の時（一九二一年）に中国広州に渡り、ミッション系の嶺南大学で四年半の留学生活を送った。彼が入学したのは、ちょうど文学研究会が発足した時期であった。嶺南大学在学中の彼は、積極的に文学研究会広州分会の活動に参加し、嶺南大学の詩人たちと交流しながら機関誌『文学』への投稿も行った。留学時期の文学への試みは、草野心平の詩的人生の出発点として大きな意味を持つことはすでに多くの先達によって指摘されている。[一] しかし、機関誌『文学』が実際に確認されてこなかったため、課題が数多く残されている。

本稿では、新発見資料――文学研究会広州分会の機関誌『文学』――を手掛かりとして、先行研究を踏まえながら広州分会の機関誌『文学』が歴史に埋もれた経緯を追跡する。また、広州分会の会員構成、機関誌の様式と内容を紹介し、広州分会と北京本部及び上海分会との連動関係を論じることによって、従来の先行研究ではつきりしなかった文学研究会広州分会の機関誌『文学』に照明をあてることにしたい。更に、広州分会の機関誌『文学』の発見を例として、近代文学研究における地方刊行物の重要性も提示したい。なお、紙幅の関係から、機関誌『文学』の文学史的な意義、また広州分会と日本詩人草野心平の関わりといった課題[二]に関して、本稿では概要的な見取り図を示し、詳細については稿を改めてそれぞれ論じたい。

二　「広州分会」の結成と機関誌の創刊

文学研究会は、一九二一年一月四日、周作人、鄭振鐸、茅盾ら十二人を発起人として、北京中央公園の来今雨軒で正式に創立した。発足に先だって一九二〇年十二月中旬、十二人の発起人の共同名義で「文学研究会宣言」（周作人起草）を北京の『晨報』（一九二〇年十二月十三日）と上海の『民国日報・覚悟』（一九二〇年十二月十九日）に発表した。そして、一九二一年一月発行の『小説月報』第十二巻第一号に、「文学研究会宣言」及び「文学研究会簡章」（鄭振鐸起草）を共に掲げることによって、正式な一歩を踏み出した。「宣言」では、「我々がこの会を発起したのは、三つの考えがあり、皆の注意を求めたい。第一、感情の連絡（中略―裴注、下同）第二、知識の増進（中略）第三、著作組合の基礎の確立[四]」と三つの項目を発起の理由として列挙し、結尾の部分は以上の趣旨に賛同する多数の同好の士の参加を呼びかけ、開放的な姿勢を見せている。後に発表された「簡章」は、「宣言」の趣旨に準じ、第九条において、「本会会址設於北京，其京外各地有会員五人以上者得設一分会」と規定している。こうした文脈の中で、「広州分会」の設置が可能になる環境と条件が整った。

文学研究会広州分会の成立とその存在を最初に天下に公表したのは、『小説月報』十四巻八号（一九二三年八月）の「国内文壇消息」においてである。載せられたのは、当時広州の嶺南大学に在籍していた梁宗岱が鄭振鐸宛に書いた手紙で、内容は次の通りである。（訳文は、特に断りがない場合は拙訳によるものである）

振鐸兄：我們這個分会，已於昨天宣告成立了。会員共九人，我和澄波兄做幹事。我們決議將於広州的一家報紙，付刊『文学旬刊』，用文学研究会分会的名義，体例与北京上海的相仿，由栄捷主編。現在將会員録的格式填好寄上。通信地址暫時可由我和澄波転。下学期則一律寄嶺南大学。請將我們的消息在『説報』的国内文壇上報告。

梁宗岱　七、八、一九二三

（振鐸兄：我々のこの分会は既に昨日を以って成立を宣言しました。会員は全部で九人、私と澄波君が幹事を担当しました。我々は次のように決議しました。広州のある新聞に付属して『文学旬刊』を刊行する。文学研究会の分会の名義を用い、体裁は北京と上海のものに似せ、栄捷君の主編による。現在、会員録の書式どおりに記入したものを送付します。連絡先は当面私と澄波君より転送できますが、来学期からは一切嶺南大学宛になります。我々の情報を『説報』の「国内文壇」にてお知らせください。

梁宗岱　七月八日、一九二三年）

書信の文末の日付「一九二三年七月八日」と冒頭の「我々のこの分会は既に昨日を以って成立を宣言しました」を照合してみれば、広州分会の結成日は一九二三年七月七日であると推定できる。

また、書信の中で梁宗岱は、広州分会が北京と上海の刊行物を模倣し、自らの機関誌を創刊する意図を表明した。実は、広州分会の機関誌が創刊された直後、上海側は同年十月の『小説月報』（十四巻十号）で「文学研究会広州分会出版的文学旬刊，第一期已於今年雙十節出版，她的内容很優美，由広州光報発行。」と宣伝していた。北京側も速やかに呼応し、同年十一月一日の『文学旬刊』（『晨報』副刊）第十六号で広州分会の『文学』の創刊号を次のように評価した。

広州文学研究分会所出的「文学」創刊号已於十月十日出版。其第一号的要目有文学与愛国心，夢与文学，欧美劇場的新趨勢，及創作敗叶底（創作）等，内容頗見豊富。其通信処為広東嶺南大学（文学旬刊編輯部）湯澄波君。但此旬刊係附於広州光報発行。

（文学研究会広州分会より出された『文学』の創刊号は既に十月十日に出版された。その第一号の要目には、「文学与愛国心」、「夢与文学」、「欧米劇場的新趨勢」、及び創作「敗葉底」（創作）などがあり、内容は頗る豊富にみえる。その連絡先は広東嶺南大学（文学旬刊編集部）の湯澄波君である。ただし、この旬刊は広州『光報』に付属して発行されている。）

ここでは、機関誌の題名、創刊日、創刊号の目次、出版媒体、連絡先などの情報が詳細に記されているが、この広州分会の機関誌自体については、今に至るまでその実像が明らかになっていない。

三　従来の言説―歴史に埋もれた経緯

具体的な考察に入る前に、機関誌『文学』が歴史に埋もれた原因を探っておきたい。文学研究会広州分会に着目した論考は、管見の限り見当たらないが、広州分会の著名詩人である梁宗岱に関する研究では、嶺南大学時期を論じる際に、広州分会のことがしばしば触れられる。梁宗岱研究の専門家である張瑞龍氏は、最初

の本格的な梁宗岱研究と言われる「詩人梁宗岱」[五]（一九八二年）において、

一九二三年夏，宗岱与同学、朋友劉思慕、陳受頤、潘啓芳、司徒寛、陳栄捷、湯澄波、叶啓芳、甘乃光共九人組織了「広州文学研究会」。（中略）為了拡大宣伝陣地，他們在『越華報』編輯的支持下，借該報版面出『文学旬刊』（中略）当時的『小説月報』上曾分別刊載他們成立分会与出版旬刊的両則消息，其中一則是公開発表梁宗岱写給鄭振鐸的信（中略）另一則是簡訊：文学研究会広州分会出版的『文学旬刊』，第一期已於今年雙十節出版，她的内容很優美，由広州『光報』（疑為『越華報』之誤―張注）発行。

（一九二三年夏、宗岱と同級生かつ友人の劉思慕、陳受頤、潘啓芳、司徒寛、陳栄捷、湯澄波、叶啓芳、甘乃光の全部で九人が「広州文学研究会」を結成。（中略）宣伝の拠点を拡大するため、彼らは『越華報』の編集者の支持を得、当該新聞の紙面を借りて『文学旬刊』を刊行した。（中略）当時の『小説月報』は彼らの分会の設立と旬刊の出版に関する二つの記事をそれぞれ掲載したことがあり、その一つは、梁宗岱の鄭振鐸宛ての手紙を公表したものである。（中略）もう一つは短い記事である。文学研究会広州分会が出した『文学旬刊』は、第一期が既に今年の雙十節に出版され、その内容が非常に優美で、広州の『光報』（『越華報』の誤りであろう―張注）によって発行される。）

と述べている。上海の『小説月報』と北京の『文学旬刊』に発表された一九二三年の二つの記事を振り返ってみると、いずれも広州分会の『文学』が広州の『光報』から発行されたと明記している。にもかかわらず、張瑞龍氏の論考においては、広州分会の機関誌の発行媒体が、『小説月報』と『文学旬刊』の記述と異なり、広州の『越華報』であると提起している。それは特に、引用文の最後の括弧の部分「由広州『光報』（疑為『越華報』之誤―張注）発行」において一目瞭然である。張瑞龍氏は、なぜこのように推測したのだろうか。次に、広州分会の発起人である梁宗岱自身の記述を引用してみよう。

一九二三年当時、広州分会の創立を鄭振鐸に知らせる手紙を書いた梁宗岱は、自筆の「一九一一―一九三〇年譜」において、二〇年代冒頭における文学活動に関して、「一九一九―一九二二年：『広州中央日報』、『群報』、『越華報』などの各大新聞に新詩を発表する。そして、常に上海商務印書館から刊行された『東方』、『学芸』、『太平洋学生』及び文学研究会が主催した『小説月報』に新詩を発表し始めるようになった」と述懐している。[六] ここで、特に注目しておきたいのは、当時よく寄稿した雑誌の中に、やはり『越華報』がある点である。梁宗岱は、この年譜において、二十年間の経歴を全部で二頁にまとめているため、記述は詳細とはいえない。しかし、その年譜は本人の手になることから、その史料価値が梁宗岱研究者に重視されていることはいうまでもない。張瑞龍氏は、梁宗岱の自筆年譜に拠って、こういう結論に辿り着いたのではなかろうか。

しかも、『越華報』説を一層強固にしたのは、ほかならぬ広州分会の発起人の一人劉思慕である。張瑞龍氏の論考が発表された二年後の一九八四年、劉思慕は彼の散文集『野菊集』の出版の際

にして、文学者として歩んできた経歴を「後記」にまとめ、広州時期について、「嶺南大学文科に在学中、先生や学生の間で陳受頤、梁宗岱、叶啓芳、陳栄捷など中外文学に同好を持つ人、全部で八人と知り合い、そこで上海の「文学研究会」を手本として、「広州文学研究会」を結成することを発起し、『文学旬刊』を編集し、機関誌として当地の『越華報』に付属して出版した」と回想している。(七)

さらに、一九八九年に出版された張振金氏の『嶺南現代文学史』も、劉思慕の回想と先行する張瑞龍氏の説を受け継いでいる。広東高等教育出版社より出版され、大学文学部の参考教科書として使われているこの文学史の広範な影響力で、広州分会の『文学』が『越華報』の副刊として刊行されたという結論は、文学史に定着する。二〇〇三年に出版された『梁宗岱文集』もやはり、依然としてこの定説を援用している。

しかし、『広州市誌』の記載によれば、『光報』は一八九七年に広州の教会人士によって創刊された。一方、『越華報』が創刊されたのは、一九二六年七月二十七日である。(八)従って、『越華報』より三年前の一九二三年十月に創刊された『文学』が、『越華報』の副刊として刊行されること自体ありえない。また、筆者の調査の限り、『越華報』には、劉思慕や梁宗岱の作品は見当たらない。一九三〇年代において、『越華報』は広州地域で発行部数の最も多い新聞となった一方、(九)『光報』に関する記録は殆どみられず、梁宗岱と劉思慕が、『光報』と『越華報』を混同した可能性は高いと考えられる。以上のことから、『文学』の出版媒体が、『光報』から『越華報』に取り替えられた経緯が明らかになる。そうした流れの中で、文学研究会広州分会の機関誌『文学』は、歴史に埋もれてしまったのである。

四　「広州分会」会員構成の実態

次に、広州分会の会員構成に着目して論を展開していく。これに関しては、発起人の梁宗岱の書信の中で言及された「將会員録的格式填好寄上」という情報は重要な手掛かりになる。実は、文学研究会は、前後して「文学研究会会員録」を二回刊行した。一回目は一九二三年三月で、その時点では会員数は四十六名しかなかった。二回目は一年後の一九二四年で、計百三十一名の会員の名前が列ねられている。(一〇)ここで、一九二四年の「会員録」から嶺南大学出身の会員に関する部分だけを抽出して引用する。

次頁の図表が示すように、一九二四年の会員録が編集された時点では、梁宗岱と湯澄波を含め、嶺南大学出身の会員数は全部で九人であった。これは、前述の『小説月報』十四巻八号所載の、梁宗岱の鄭振鐸宛書信に明記された、「会員共九人、我和澄波兄做幹事」と一致している。また、「文学研究会会員録」の登録番号によれば、湯澄波、梁宗岱の二人が先に入会し、甘乃光、陳栄宜、司徒寛、潘啓芳、陳栄捷、劉燧元（後に劉思慕と改名―筆者注）、陳受栄の七人は同時期に集団で入会したことがわかる。

ここでは、文学研究会に入会前後の梁宗岱と湯澄波の略歴を紹介する。梁宗岱（一九〇三―一九八三）は「文学研究会広州分会」を打ち立てた中心人物であり、詩人、仏文学者、翻訳家として世に知られる。広東省新会県生れ。広州のミッションスクールで

表一　「文学研究会会員録」嶺南大学部分（一九二四年）

姓名	登記名	号	籍貫	曾習之外語	通信地址
湯澄波	八八		広東花県	英文、法文	広州嶺南大学
……（中略―筆者）					
梁宗岱	九二	菩根	広東新会	英文	広州嶺南大学
……（中略―筆者）					
甘乃光	一一四		広西岑溪	英文	広州嶺南大学
陳栄宜	一一五		広東番禺	英文	広州嶺南大学
司徒寛	一一六		広東開平	英文	広州嶺南大学
潘啓芳	一一七		広東南海	英文	広州嶺南大学
陳栄捷	一一八		広東開平	英文	広州嶺南大学
劉燧元	一一九		広東新会	英文	広州嶺南大学
陳受栄	一二〇		広東番禺	英文	広州嶺南大学

ある培正中学校に在籍していた時期から、彼は新詩の創作を始め、一九二二年、鄭振鐸と茅盾の勧めにより文学研究会に入会し、『小説月報』と『文学週報』に作品を発表する。一九二三年、嶺南大学文科に入学し、同年の七月、「文学研究会広州分会」を結成した。更に、一九二四年に処女詩集『晩祷』を上梓するに至り、注目を浴びる。

湯澄波（一九〇二―不明）、広東省花県出身。一九二三年、嶺南大学で文学士の学位を取得。卒業後、嶺南大学助教、黄埔中央軍官学校教官などを歴任する。英語とフランス語に精通し、一九二〇年代にバイロンやメーテルリンクの中国への紹介と翻訳に精力を注ぐ。例えば、「広州分会」が立ち上がる前の一九二三年三月、彼はメーテルリンクの戯劇四篇を完訳し、『梅脱霊戯曲集』に収め、同年の十二月に文学研究会叢書の一冊として出版した。また、彼の論文「拜倫的時代及拜倫的作品」は『小説月報』第十五巻第四号（一九二四年四月）の特集『詩人拜倫的百年祭』にも収められている。梁宗岱と湯澄波が先に会員の身分を持ち、文壇で活躍していたことより、二人は「広州分会」の結成の際に、幹事の役割、北京本部との連絡の仕事を担当することになったと想像される。

今回筆者が新しく発見した広州分会の機関誌『文学』の創刊号の最後には、「本刊担任撰述者」が載せられている。執筆者について、「本刊の執筆者は、陳受頤、陳栄捷、陳受栄、甘乃光、司徒寛、潘啓芳、叶啓芳、湯澄波、梁宗岱、劉燧元である」と説明している。この説明と前記の「会員録」を見比べれば、二箇所の相違点がある。一箇所目は、一九二三年七月の分会結成当初は九名で発起し、機関誌の創刊号が刊行された十月に至って、さらに叶啓芳というメンバーが増え、十人となっている点である。実は、一九二四年の「会員録」を確認すると、叶啓芳の名前は湯澄波に続いて第八十九番目の会員として列ねられている。

叶啓芳（一八九六―一九七五）、広東省三水出身。一九二〇年、広州の培英中学を卒業後、ミッション系の協和神学院に入学する。一九二二年春、彼は広州協和神学院の学生代表として、北京で開かれた第十一回世界基督教学生同盟代表大会に出席し、期間中、当時燕京大学の代表として大会に参加してきた許地山と出会う。宗教と文学に興味を持つことが共通している二人は、初対面なが

ら旧知のように意気投合した。燕京大学の学術雰囲気にも魅了された叶啓芳は、一九二二年秋燕京大学に転入した。[二二] 北京に転校して間もなく、彼は『小説月報』に翻訳作品を発表した。興味深いのは、『小説月報』第十三巻第十号（一九二二年十月）に掲載された「聖経之文学的研究」（英・Prof W. H. Hudson 著）という翻訳作品が、叶啓芳と湯澄波による共訳である点である。恐らく、「広州分会」が結成される前に、同じく広東出身の叶啓芳と湯澄波は、共訳の機会を通して既に知り合いになっていたと推測できる。また、劉燧元は叶啓芳の「広州分会」加入の経緯ついて、次のように語っている。[二三]

当時啓芳已従燕大畢業回来，在母校培英任教師，我們了解到，啓芳也有同好，並且同上海全国性的文学研究会名作家鄭振鐸、許地山等人熟悉，便邀他和我們一起創辦「広州文学研究会」。

（当時啓芳はもう燕京大学を卒業して帰って来ており、母校の培英中学校で教員を務めていた。私たちは、啓芳も趣味を同じくし、また上海の全国的な文学研究会の著名作家鄭振鐸、許地山等と親しいことを知った。そこで彼を誘って私たちと一緒に「広州文学研究会」を創立した。）

実は、叶啓芳が燕京大学を卒業したのは一九二四年夏であり、また培英中学で教鞭を取ったのもそれ以降のことであった。劉燧元の記述には、些か記憶違いがあると考えられる。しかし、この記述と、叶啓芳と湯澄波との交友関係、また創刊号の執筆者となった事実を綜合してみると、叶啓芳がやはり七月の「広州分会」の結成から十月の機関誌の創刊までの約三カ月の間に誘われ、後にメンバーとして加えられたと考えられる。

そして、二箇所目の相違点とは、広州分会の陳姓の会員たちが表一の「会員録」においては「陳栄宜、陳栄捷、陳受栄」と記されるが、創刊号の「本刊担任撰述者」においては「陳受頤、陳栄捷、陳受栄」となっている点である。石曙萍氏は『知識分子的崗位与追求：文学研究会研究』（東方出版中心、二〇〇六）の第二章「文学研究会会員考」において、第一二〇号会員の「陳受栄」について、「陳受頤」と同一人物かと疑われるとの注釈を付け加えている。しかし、「広州私立嶺南大学歴年畢業学生一覧表（一九一八―一九三四）」と一九二四年度の『嶺南大学年鑑』にある「歴年大学畢業人数表」を照合してみれば、陳受頤は一九一八年、陳受栄は一九二四年にそれぞれ文学の学位を取得している。[二四] 従って、陳受頤と陳受栄は異なる人物である。また、広州分会結成の際、既に嶺南大学文科の副教授を担当していた陳受頤は、一九二五年アメリカのシカゴ大学へ留学し、一九二八年に比較文学の博士号を獲得した。一九二九年帰国後、嶺南大学の教授、北京大学歴史学科の主任などを歴任する。一方、陳受栄は、卒業後直ちに嶺南大学の附属華僑学校の教職に就いた。陳受頤、陳受栄の二人は、「文学研究会広州分会」の中で、文学の創作と研究に非常に活躍したことから、石曙萍氏の「陳受栄＝陳受頤」という推測は誤解である。さらに、「広州私立嶺南大学歴年畢業学生一覧表」と表一の「会員録」に記された二人の出身地を対照してみると、二つの資料における陳受栄の出身地は完全に一致している。一方、陳受頤と陳栄宜の出身地はいずれも広東番禺である。従って、陳栄宜はただ陳受頤が一九二四年の「文学研究会会員録」に登録し

た名前ではないかとも考えられる。

また、『文学』は、第四期から全国各地から寄稿してきた作品も掲載するようになった。今回発見した第十期までの執筆者は、創刊号に記されている十名を含め、二十四名にも及ぶ。特に、日本詩人である草野心平の新詩を掲載したところに、『文学』の編集者たちの開放的な姿勢が反映されている。

五　「広州分会」機関誌『文学』の発見

広州は通商港として、最も早い時期から西洋文化の影響を受けてきた大都市の一つである。十九世紀の初年から、幾つかの外国語の新聞や雑誌も広州で刊行されるようになった。[一五]「五・四」新文化運動の洗礼を受け、一九二〇年代に至って、嶺南（広州）地域における新文化を宣伝する雑誌もようやく現れてくる。[一六]しかし、それらの刊行物の全ては、総合的なものであり、主に政治や経済の領域に偏っている。その中では、嶺南大学青年会が一九一七年九月に創刊した学内広報『嶺南青年』（一九二一年十月『南大青年』と改名）と、嶺南大学学生自治会が一九二〇年四月に創刊した雑誌『南風』の二種が、文学研究会広州分会と密接な関係をもち、特筆に値する。

一九二一年九月二十五日の『嶺南青年』は、「本報職員表」の欄で広報の役員を公表した。論説記者として紹介されたのは、陳栄捷、甘乃光、司徒寛三人である。「広州分会」が創立されて以降、三人は新詩、散文などの作品を頻繁に寄稿するようになった。また、学内の学術交流の場として創刊された『南風』は、第一巻第四号（一九二〇年十二月）で「西洋詩専号」の特集を組んだ。中には、陳受頤の「美国新詩述略」、陳栄捷の「詩之真功用」と「詩翁雪利的研究」、甘乃光の「白浪寧研究」をはじめ、全部で十篇の論文と十三首の詩が収められている。嶺南地域において系統的に欧米現代詩を紹介するのは、この「西洋詩専号」が最初である。しかし、『南大青年』と『南風』はいずれも嶺南大学の学内の総合刊行物であり、主に『文学』が創刊される前の、彼らにとって文学の修行の場であったため、長く続けられなかった。新聞類においては、『広州民国日報』が一九二三年六月に創刊され、「消夏」という文芸欄も設置されたが、内容は主に文言で書かれた連載小説と雑談が中心だった。創刊後の七月から、『広州民国日報』は宋春舫翻訳のフランスの戯劇『梅毒』を連載し始めたが、新文学の紹介はさほど活発ではなかった。そういう意味で一九二三年十月に、文学研究会広州分会が創刊した機関誌『文学』は、嶺南地域で最初に出版された新文学の専門誌と言えよう。筆者が今回発見したこの貴重資料は、現在広州市の省立中山図書館に収蔵されている。次頁に、創刊号の写真を挙げる。

広州分会の機関誌『文学』は、版面が当時の北京『晨報』などの同じ大きさで、分量が二葉四頁、月三回（毎月の十日、二十日、三十日）刊行の新聞副刊型の旬刊である。また、『文学』の第三期から、標題部分の下に「広州光報発行、随報附送、毎張零售銅円三枚、中華郵政認為新聞紙類」と明記されることは、発行者が『越華報』ではなく『光報』であることの証左となる。しかも、『光報』は単に出版と発行の媒体に過ぎないと考えられる。一九二三年十月十日に創刊された『文学』は、古典詩歌、文芸理論、

中華民國十二年十月十日 （第一期）

文學

文學研究會廣州分會旬刊

第一期

民國十二年十月十日

廣州光報發行

目次

創刊的話
文學家與愛國心 陳受頤
星空（詩） 梁宗岱
夢與文學 陳榮捷
草際（詩） 草野心平
歐美劇場的新傾向 司徒寬
敗葉底（劇） 劉燧元
鄉愁（雜感） 葉啓芳

創刊的話

自西學東漸以來，我們南部底人士，多從事於物質或制度的改善。對於西來的文化—尤其是文學—雖誠懇地盡量接受，那未曾活潑地積極提倡，新世紀的廣東底文學田地，竟可直直捷捷說是「荊棒滿目」。就是少數好提倡文化文學的人，也多寄寓北省，不肯以南部做中心。講文講學的風氣，比起嘉慶道光年間，還恐怕比不上罷。

且慢說這些是悲觀的話。事實如此，又何苦翻空來講？這幾年間，文學底創造，算有點努力了；文化運動底迴響，也不是絕無聲息了，儘可以使我們略略奮興。

我們開闢這所新的田園，就是一種奮興底表示。在沈寂的廣州裏，也許有多少其他的田園，開着馨香爛漫的花，結着美麗繁實的果，產生着蔬菜，培植着樺桁。但是我們覺得遼廓的廣野中，還有墾荒的必要。願盡我們很薄弱的力，來求諸君底同情。

新闢的田園，常不免有些野草，我們不敢因此而灰我們底心，尤不敢因此而蒙我們底過。我們自己看不到的缺點，願得諸君底明示和批評。

新闢的田園，原不是個人或數人底私產，耕植底工作，又不是任何人所能專佔的特權。在這個「稿多工少」底時期，我們只更盼望同情的人們，不嫌園地底湫隘，能和我們合作。

多馬斯亞諾德把他底「甜美光明」(Sweetness and Light) 幾個字，交給我們做口號了，一起來努力罷。來耕耘這荒蕪的田地之一角罷。

（我們創刊號，剛在國慶日出版，不是有意的佈置，而是湊巧的遇合。然而這個遇合，也未嘗不令我們歡喜。附此聲明）

文學家與愛國心

陳受頤

當拿破崙—不可一世的拿破崙—統率着他底常勝軍，長驅直進，侵入普魯士的時候，德國底詩人歌德輩，竟然不識時務地，大宴拿翁於懷馬宮庭！好一齣宗邦覆滅的慘劇，與英雄名士的盛會，同時舉行！誰不說歌德是全沒心肝的人？誰不說詩人懂不得愛國？誰不說外國名士，不感覺國亡家破底痛苦？

也許是外國底文人，沒有什麼愛國的思想和衞國的感奮嗎？從表面上看來，自然是狠像的。當岳飛高唱「怒髮冲冠，凭欄處瀟瀟雨歇。擡望眼，仰天長嘯，壯懷激烈。」的時候，宋朝雖已偏安江左，還有半壁山河。當屈原長吟「亦余心之所善兮，雖九死其猶未悔！」「陟陞皇之赫戲兮，忽臨睨乎舊鄉，僕夫悲余馬懷兮，蜷局顧而不行。」的時候，楚國雖是國境日削，懷王不返，還是與他國並峙。若是他們也有歌德底胸懷，也就不至生出金牌之召，懷沙之慘了！

「死去元知萬事空，但悲不見九州同！王師北定中原日，家祭無忘告乃翁。」好一個纏綿宛轉的愛國老詩人，比起哥德，更是一個狠顯明，狠刺激的大反照！

哥德與施當，果真是沒心肝的賣國者嗎？果真是對於殘殺的拿破崙，甘心做脅肩諂笑的行爲嗎？果真是他們底愛國心，比不上我們巡行，演說的小學生們嗎？這個問題，原不是輕淺的比較，所能解答的。拿翁長驅直進的時候，試問除了蓋世詩人之外，還有誰敢與他分庭抗禮？范大克說的好：「哥德和施當對德國的供獻，正像栢任和施各得對蘇格蘭的供獻一般！」

外國底詩人，果真是沒有愛國的思想和衞國的感奮嗎？細論起來，恐怕和我們素把愛國和忠君的思想，合攏一起的比起來，也不並非比不上罷。

有一會，斯達巴被敵人侵凌，請救於雅典，雅典並不派出救兵，只叫一個蹩脚的教員，跟着斯巴達底使者回去。這教員是個詩人—他叫特弟斯—他底詩歌竟可以敎斯巴達底戰士勇氣百倍，把敵人輕易地趕了去！這雖是個傳說，也就見得西洋人對於詩人底使命，當得如何神聖了！

由此見得，詩人雖是天縱之才，也是凡塵所造的，他們底愛國心，未必就見得是比平常人的薄弱；愛國心理，是十方同感的，未必是「東西半球，分遠歧異」的。（這是英國近代著名詩人吉百齡底狠有智慧的作品中之最無意識的一句話）

扶清滅洋之義和團—可怕的義和團呵！—也是愛國心底實現嗎？這個無聊的問題，洋船般駛進我底腦海！幾乎是「對」啊！「扶清滅洋」，「難道就不是一種較好的居心嗎？「扶清滅洋，」難道就不是根本地與「扶英滅德」相同—至少也相似嗎？大戰完結之後，香港底英人，還說「德國人永遠是德國人」！同仇敵愾底心，竟產生暴亂凶殘底事。也無怪老博士—約翰孫—做英文字典時說道：「愛國者惡人最後之遁詞也」了！

幸而世界上的眞正文學家，總不肯甘心做義和團，也足以証明范大克所說的是的當，是該當：「愛國心是對於國家，爲一個高尙的緣故，發一種高尙的摯愛。」范氏雖會這樣說，可是他講到大戰時底文學，便不知不覺地加了無數的廢話，說德國所主張的是強暴，故此沒有文學的好果；而英法諸國所主張的是正義，故雖處在戰雲慘黯之中，詩壇上還給出無數焯煌燦爛的花！名實未虧，而喜怒爲用，他底話正是人們常常犯着的矛盾底實証啊！

文學家底愛國心，不是盲目的，是狠公平的。我們試看丁尼孫，英國文明底摯愛者，他在「你該愛國」(Love Thou Thy Land) 和獻女皇詩 (To the Queen) 和惠靈吞之死 (Ode on the Death of Duke Wellington) 等篇裏，何嘗不葆愛英國。後來美國革命成功，宣告獨立，丁尼孫不特不替英倫發氣，反說英國底兒孫，敢和母邦爭義理，這正是英國底光榮。他底眼光，何等公平，他底胸懷，又何等燎亮！

文學家底愛國心，也不是自私的。放浪不羈的拜輪，肯甘心爲他國—希臘—底自由，捐棄他底生命。他一生底創作，每每爲希人告哀，字裏行間，常帶着深刻的悲思和同感，就是讓希人自己去寫，也恐怕不過如是。「吾生豈爲奴，與此長終古。」「晨朝大點兵，至暮無復存，一爲亡國哀，淚下何紛紛。」「故國不可求，荒涼問水濱，不聞烈士歌，勇氣散如雲。」「威名盡墜地，舉族供

図一　広州分会機関誌『文学』の創刊号（一九二三年十月十日）

翻訳、散文、小説、伝記、話劇、評論、新詩など様々なジャンルの作品を掲載しており、広州だけでなく中国全体の近代文学研究にとっても価値が高いと考えられる。以下、原誌によって『文学』の細目を作成する。

文学研究会広州分会機関誌『文学』旬刊細目（『光報』発行）

凡例

一、本目次は、文学研究会広州分会の機関誌『文学』の第一期から第十期まで所収の文章を、掲載された順序に並べたものである。

一、原本の号数表記は、創刊号は「第一期」とし、それ以降は数字だけで表記されているが、本目次では便宜上「第□期」に統一する。

一、各項目は、基本的に標題、分類、著者名、掲載頁の順に記載し、掲載が二頁以上にわたる場合は、開始頁―終了頁としている。

一、分類は、各目次の表記に従う。ただし、目次にない場合は筆者の判断で付けた。（※）印は筆者による注記である。

第一期　民国十二年（※一九二三年）十月十日発行

創刊的話　（※無署名）　一
文学家与愛国心（※雑文）　陳受頤　一―二
星空（詩）（※太空之八）　梁宗岱　二
夢与文学（※雑文）　陳栄捷　二
草際（詩）（※潘啓芳譯）　草野心平　二
欧美劇場的新傾向（※論文）　司徒寛　二―三
敗叶底（劇）（※散文詩劇）　劉燧元　三―四
郷愁（雑感）　叶啓芳　四
本刊啓事　四
本刊担任撰述者　四

第二期　民国十二年（※一九二三年）十月二十日発行

詩的実験（※新詩評論）　湯澄波　一―二
太空之九（※新詩）　梁宗岱　二
古希伯来詩韵研究（※論文）　叶啓芳　二
灯花忽落（※新詩）　潘啓芳　二―三
丹波的微漾（※散文詩）　陳栄捷　三
白楽天与自然詩（※論文）　甘乃光　三―四
女鬼（※短編小説）　劉燧元　四
沙漠的尽頭（※散文）　陳受栄　四
陳栄捷啓事　四
本刊担任撰述者　四

第三期　民国十二年（※一九二三年）十月三十日発行

中国文学里的神話（※論文）　陳栄捷　一―二
秋灯散記（※散文）　（※劉燧元）劉　穆　二
古希伯来詩韵研究（下篇）　叶啓芳　二―三
別（※散文）　梁宗岱　三―四
伊許了（※新詩）　司徒寛　四
思想的痕迹（選譯）（※随筆）（※太戈爾著）　湯澈譯（※湯澄波）　四
晨曦的百霊（※新詩）　甘乃光　四

沙漠的尽頭（承前）（※散文）　陳受栄　四
通訊、本刊啓事　四

第四期　民国十二年（※一九二三年）十一月十日発行

李清照的欣賞（※論文）　甘乃光　一―二
丹波的微漾（※散文詩）　（※陳栄捷）陳　捷　二
元雑劇的白（※雑文）　司徒寛　二―三
雙槳默默地撥過（※新詩）　（※劉燧元）劉　穆　三
譯西洋文字所応知的一件事―文法　李寿堅、崔翰順　三―四
蟋蟀之歌（※新詩）　陳培瑋　四
太戈爾来華消息　記　者　四
小説月報第十五巻号外
中国文学研究号徴文啓事　四
編輯部啓事　四

第五期　民国十二年（※一九二三年）十一月二十日発行

廃話（※論文雑感之一）　陳受頤　一―二
歌途（※新詩　太空之十三）　梁宗岱　二
遅暮的笑（※散文詩）　司徒寛　二―三
覆壓着的我（※散文）　甘乃光　三
売曲者之歌（※新詩）　陳栄捷　三
思想的遺痕（※随筆）（※太戈爾著）　劉木選譯（※劉燧元）　三
読「桃色的雲」（※新詩）　穆参化　三
突変（※散文）　叶啓芳　三―四
评李加雪君的「浪漫主義的特殊色彩」　中吉慈诗的譯文（※評論）　梁宗岱　四

第六期　民国十二年（※一九二三年）十一月三十日発行

読納蘭詞雑話（※論文）　（※劉燧元）劉　穆　一
小書斎兼寝室的悲劇（※新詩）（※潘啓芳譯）　草野心平　一
暮（※新詩　太空之五）　梁宗岱　一
読冰心女士的「寂寞」底反感（※評論）　張渭涇　二―三
凌絲（※散文詩）　宛　叶　二
読李加雪的「吉慈的厄運」（※評論）　李寿堅、崔翰順　三―四
通信　四

第七期　民国十二年（※一九二三年）十二月十日発行

文学的天才（※雑文）　陳栄捷　一―二
期待（※新詩）　劉燧元　二
一個技術家（※莫泊桑小説）　（※湯澄波）湯澈譯　二―三
余響（※散文詩）　陳受栄　三
関於紅楼夢片断的感想（※論文）　黄　石　三―四
月（※新詩）　庸　能　四
再評李加雪君吉慈詩譯文（※評論）　梁宗岱　四

第八期　民国十二年（※一九二三年）十二月二十日発行

雅歌的研究（※論文）　梁宗岱　一―二
江上的酒後（※新詩）　劉燧元　二
古希伯莱詩歌之構造（※論文）　叶啓芳　三―四
鴻蒙的回復（※小説）　張渭涇　四

第九期　民国十二年（※一九二三年）十二月三十日発行

詩里的象徴主義（※論文）　甘乃光　一
和平的祷告（※新詩）　陳　寂　一―二
和諧（※散文）　李聖華　二
余響（※散文詩）（※連載）　陳受栄　二
蕎麦（Hans Anderson 作）（※散文）　黄延凱譯　二―三
碧穹（※新詩）　王哲武　三
鴻蒙的回復（二）（※小説）　張渭涇　三―四
第十五巻的小説月報預告　四
晩霞（※新詩）　余竹籟　四

第十期　民国十三年（※一九二四年）一月十日発行

小泉八雲（※論文）　陳栄捷　一―二
微風（※新詩）（※潘啓芳譯）　草野心平　二
西沉（※戯劇）　（※潘啓芳）潘　凡　三
散后（※新詩　絮語之十八）　梁宗岱　四
鴻蒙的回復（三）（※小説）　張渭涇　四

筆者による調査の結果、今回第一期から第十期まで確認することができた。しかし、いつ正式に停刊（或いは廃刊）されたかは、今の時点ではまだ確定できない。文学研究会広州分会との関係が非常に深かった日本詩人の草野心平について、小論ではあまり触れることができないが、彼が嶺南大学在学中に書いた文章の中に、『文学』に言及した幾つかのものが残されている。[一七]そこから、『文学』の出版状況に触れたものを引用してみよう。

僕たちのやってゐる「文学」（支那語）の第十一号かに陳受頤が「野口米次郎」を書いた。それを一部同氏に送つた。返事がきたその晩、僕が広東から（学校は広東市内ではなく島の中にある）かへつてくると、ヨネ・ノグチから手紙きたといふ。すぐ陳のところへいつた。みんなでよろこんだ。氏の送つてくれた英詩をみんなで声をたてて読んだ。その晩のうちに手紙のことは僕たちのグループにしれわたつてしまつた。

この文章は、一九二四年三月に彼が自筆謄写版の詩集『空と電柱Ⅱ』を出版した時に書いた「編輯後記」が初出である。[一八]書かれた時期からしても、また機関誌『文学』に作品を発表するほど文学研究会広州分会に深く関わっていた点からしても、草野心平の言は信憑性が高いと考えられる。草野心平の記述によれば、『文学』の第十一期の中には陳受頤が「野口米次郎」について書いた文章が載せられていたと言う。また、陳栄捷が、『文学』の第十期に、小泉八雲についての長文の本格的な論文を発表していることなどからみても、広州分会の作家たちは、草野心平を通じて、日本文化と日本文人に強い興味を持っていたのかもしれない。今回発見した第一期から第十期までに、「野口米次郎」に関する文章は見当たらない。しかし、草野心平が陳受頤の文章をきっかけに野口米次郎と手紙を交わしたという記述から、『文学』は第十期以降も出版されていたと推測できるだろう。これらについては、今後の課題にしたい。

六　『文学』に見る北京、上海、広州の連動

広州の文壇を発展させようと念願した広州分会の会員たちは、北京と上海の刊行物を模倣し、自らの機関誌の創刊を実現した。広州分会の機関誌の様式が上海の『文学』とほぼ同じであることからも、その意図は読み取れる。『文学』の創刊号に発表された「創刊的話」において、広州分会の発起人たちは、当時の広州文壇をの現状を顧みつつ、創刊の目的と宗旨などを次のように語っている。

自西学東漸以来，我們南部底人士，多従事於物質或制度的改善。對於西来的文化—尤其是文学—雖誠懇的尽量接受，卻未曾活潑地積極提倡，新世紀的廣東底文学田地，竟可直直捷捷説是「荊榛滿目」。就是少數好提倡文化文学的人，也多寄寓北省，不肯以南部做中心。（中略）我們開闢這所新的田園，就是一種奮興的表示。在沈寂的広州裏（中略）還有墾荒的必要。

（西学東漸以来、我々南部の人士は、物質或いは制度の改善に努め取り組んできた。西洋から伝来した文化—特に文学—に対して、可能な限り誠実に受け入れたが、活発にかつ積極的には提唱しなかった。新世紀の広東の文学の耕地は、率直に言って「見渡すかぎり荒涼としている」状態にある。少数の文化や文学を提唱しようと志す人であっても、その多くは北部に居住しており、南部を中心にしようとは思わない。（中略）我々がこの新しい耕地を開墾したのは、一種の奮起の表れである。沈寂たる広州において（中略）荒れ地を開墾する必要がまだまだあるのである。）

この結社宣言からは、文学研究会の一「分会」としての広州分会が、結社を企てた時点から、文学の中心たる北京の本部と上海分会を常に強く意識しながら、広州の一「地方」に拠点をおいて全国へ発信しようとする姿勢が窺えよう。

広州分会の『文学』は、様式の模倣のみならず、内容面においても、中央の呼びかけに応じて執筆活動を行った。文学研究会の「文学研究会簡章」の第二条に記されていた「本会以研究介紹世界文学整理中国旧文学創造新文学為宗旨」が示すように、文学研究会は外国文学の翻訳を非常に重視し、ヨーロッパ、ロシア、アジアなどの外国文学作品の紹介と翻訳の事業に取り組んでいた。この趣旨は、正に広州分会の『文学』にも直接反映されている。第一期から第十期までに掲載された文章を通覧すると、外国文学の紹介、研究及び翻訳が『文学』の重要部分を占める。例えば、研究論文に関しては、司徒寛の「欧美劇場的新傾向」、叶啓芳の「古希伯来詩韵研究」と「古希伯莱詩歌之構造」、梁宗岱の「雅歌的研究」、甘乃光の「詩里的象徴主義」、陳栄捷の「小泉八雲」などがある。また、翻訳の技術の討論や、ほかの翻訳者の訳作をめぐる論争も多く掲載しており、それは梁宗岱の「評李加雪君的『浪漫主義的特殊色彩』中吉慈诗的譯文」と「再評李加雪君吉慈詩譯文」などに代表される。毎期必ず外国文学に関する文章を載せ、欧米と日本文学の紹介を実践していた。

これらの翻訳状況を見ると、二つの特徴が窺える。一つ目は、詩歌に関する文章が多いこと、二つ目は、本格的な学術論文の翻訳が数多く占めていることである。それは、嶺南大学を母体に創

立された文学団体自体の性格と、その大学の教育の特色や文化環境との関係があると考えられる。ミッション系の嶺南大学の源流は、一八八八年にアメリカ人の資本によって広州で創設された「格知書院」に始まり、一九一二年に「五嶺の南」という意味で、「嶺南」と名づけられた。[一九] 一九二五年に出版された『嶺南大学年鑑』の「職員一覧表」によれば、一九二四年度の外国語・外国文化と国文・中国文化に関する授業及び教員の配置は次のようである。

陳輯五：国文、説文、白話詩、小説戯曲、文学／基来度：英文、作文、文学、詩歌、徳文／格礼：英文、作文、文学／李労士：英　国実業史／白士徳、廬観偉：宗教／美智貽：英文、歴史／

授業の担当状況から、外国人教師が多く、英語と文学の教育が重視されており、特に、外国詩歌や白話詩の教育に力を入れていた様子が窺われる。こういった環境の中で培われた広州分会の会員の多くは詩人であり、新詩に興味を表し、積極的に詩の創作と翻訳を実践していたのである。また、「文学研究会宣言」では、「増進知識」が提言され、「整理旧文学的人也須応用新的方法，研究新文学的更是専靠外国的資料」と記されている。機関誌『文学』にも学術論文が多いのは、やはり外国文学の研究が中国の新文学を発展させる道であるという理念があってのことと思われる。

『文学』における北京と上海との連動を顕著に表わすものとして、機関誌中に掲載された文学研究会動向の宣伝（例えば、第四期の「小説月報第十五巻号外）や、北京と上海で活躍している文学研究会の作家の作品に対する反響、または批評をあげることができる。一例として第二期には湯澄波の「詩的実験―中国新詩現在所応取的進程」という新詩評論が掲載されている。この評論で湯澄波は、一九二三年までの五、六年間の新詩形式の発展を、胡適の『嘗試集』に代表される第一段階、康白情の『草児』（一九二二）と兪平伯の『冬夜』（一九二二）に代表される第二段階、陸志韋の『渡河』（一九二三）に代表される第三段階に分ける。作者は新詩における実験精神の重要性を強調し、形式上の実験について、次のように指摘している。

一般作家対於形式之建設問題既看得太軽，所以便産生両種不　好的現象：一種是使新詩不能尽脱旧日的格調而成為純粋的新詩。（中略）第二種是使新詩全無形式，無以別於散文。（中略）実在説，新詩既不是散文，則独立的形式是不可免的；詩的形式既是不可免的則形式問題是不能不注意的。

（一般に作家は形式の建設という問題を軽視しすぎるがゆえに、二つの悪い現象を引き起こす。一つには、新詩を古い格調から完全に抜け出させることができず、純粋な新詩になることができない。（中略）二つには、新詩を形式の無いものにさせるため、散文と区別がつかなくなる。（中略）実を言えば、新詩は散文ではない以上、独立した形式はなくてはならないのだ。詩の形式がなくてはならないからには、形式の問題に注意を払わなければならないはずだ。

このように、湯澄波は、新詩の各段階における形式の進化史をまとめて分析する上で、「詩人対於内容和形式都応該先有一種自己以為正当的理論然後随着這個理論的指導去実験」といった結論を打ち出している。一九三五年、朱自清は『中国新文学大系・詩集』の「導言」で、陸志韋について、「一個有意実験種種体製，

想創新格律的，是陸志韋氏。（中略）但也許是時候不好吧，被忽略過去了」と評価した。湯澄波は、朱自清より十年も早く陸志韋の詩作に注目し、『渡河』における形式の実験を賞賛した。新詩の形式問題が検討される最中、広い視野を持ちながら、全国的な新詩の発展を把握し、形式上の散文化や軽視の弊害をずばり突いている湯氏のこの一文から、機関誌『文学』の執筆者たちが文学研究会ひいては全国の著名作家の作品を常に関心を寄せ、真剣に論議と批評を行っていたことが分かる。北京・上海の文学研究会作家の作品への共振や感想を、評論の形で結晶化した作品は他にもある。例えば、第六期に張渭涇の「読冰心女士的『寂寞』底反感」が掲載されているが、これは謝冰心の散文「寂寞」に対する評論であり、一種の読者の反響であろう。また、『小説月報』第十二巻第十号（一九二一年十月）は「被損害民族的文学号」を特集した。一方、広州分会の『文学』に掲載された叶啓芳の「古希伯来詩韵研究」と「古希伯莱詩歌之構造」、梁宗岱の「雅歌的研究」もこの思潮に応じて、古ヘブライ文化を研究した成果であろう。

更に、北京と上海に連動した活動状況が垣間見られるのは、一九二四年タゴールの来華に対する一連の反応である。タゴールの来華を実現するのに大いに力となった人物は、文学研究会会員の徐志摩である。また、詩聖タゴールの訪問は、当時の中国文壇にとって極めて重大な事件であったため、文学研究会は北京と上海分会のそれぞれの刊行物を舞台として、タゴールの著作の翻訳を精力的に行った。例えば、文学研究会の代表的な文芸雑誌『小説月報』は、一九二三年第九号及び第十号でタゴールを特集し、北京の『文学旬刊』と上海の『文学』は、徐志摩とタゴールとの文通を掲載したほか、タゴールの詩歌の翻訳も数多く発表した。一方、広州分会もタゴールの作品を翻訳して紹介し、第四期の「太戈爾来華消息」という記事において、徐志摩とタゴールの文通を転載した後、

有些人説他会不到広州来。一方面顧子仁先生在印度時，太氏又曾親対他説必到広州一月。據上海鄭振鐸君給我們的信，則到広州来与否還不知。我們究不知那一説是。但是我們總希望他能来、並且希望我們広州一般的人士対這件事情留意。

（一部の人は彼が広州にこないだろうと言う。一方、顧子仁氏によれば、インドに滞在中、タゴール氏が自ら彼に、必ず広州に一ヶ月滞在すると告げたと言う。上海の鄭振鐸君の我々に宛てた手紙によれば、広州にくるかどうかはまだ分からないという。我々は一体どちらが正しいか分からない。しかし、我々は彼が来訪することを切に希望し、同時に我々広州の一般の人々もこのことに関心を示されるよう希望する。）

と述べ、タゴールの来華の日程と広州来訪に高い関心を寄せた。以上見てきたように、広州分会は、機関誌の様式、内容の編集、中央の文化事件に対する呼応等の面において、様々な形で北京と上海と連動して、三つの地域に跨る空間を創出してきたのである。

七　結語

以上、歴史に埋もれ、従来注目されてこなかった「広州分会」とその機関誌『文学』に関する基本的な問題について考察した。

大学の教師と学生が結成した文学研究会広州分会は、文学に対する熱い思いと広州文壇を発展させようとする理想を機関誌『文学』に託した。記事を作り、文学作品を書き、雑誌を編集する作業を通して、広州分会の若い会員たちは、熱心に北京や上海、また身近な人々へ発信しようとする思いを綴る。十人の会員を持つこの一分会の機関誌の中には、優美な詩歌があり、知性を持つ散文があり、学術性の高い論文があり、それらは読む者に感嘆を呼び起こす。また、広州分会の会員たちは、常に北京と上海分会を意識しながら自らの機関誌を創り出した。そこには、北京や上海との手紙の往復があり、交流があり、応酬があり、開かれた空間があった。広州分会の『文学』自体、北京や上海への「手紙」の役割を果たしたと言えるだろう。

「五・四」運動以後、文学の性質は自覚的な「救国」と「啓蒙」の形態を示すように変質した。文学研究会は、鮮明な流派上の旗印を挙げなかった。しかし、鄭振鐸が提唱した「血和涙的文学」は、「為人生」の写実主義の方向性を示した。一方、『文学』の創刊号の第一篇として掲載されたのは、陳受頤が書いた「文学家与愛国心」である。作家としての責任、文学家と国家の関係を論じたこの一文は、広州分会全体の主張と見做される。実は、北京と上海の文学研究会の作家が選択した文学的生涯と全く異なり、広州分会の作家たちは後にほぼ全員が「文学救国」の道を放棄し、政治家もしくは学者の道を選んだ。それは、恐らく広州の独特の革命伝統と環境との関係があるが、「為人生主義」を中国の現実の中で最大限に実現しようとする理想があったと思われる。広州分会会員の集団的な「転向」を理解するためには、『文学』に掲載された様々な文章は手掛かりとして非常に重要である。また、『文学』が史料として高い価値を有するもう一つ理由は、日本詩人草野心平という存在にある。今回発見した『文学』には、従来日本側に知られていなかった、草野心平が当時投稿した三つの詩作が認められる。嶺南大学の留学時期、草野心平に大きな文学的刺激と励みを与えた人物は、学友かつ詩人の劉燧元と梁宗岱である。また、劉燧元の紹介により、草野心平は同時代詩人徐玉諾と彼の作品を知り、徐氏の処女詩集『将来之花園』に共鳴した。特に、『将来之花園』の中に頻繁に現れる擬音語と擬態語を使う詩法は、草野心平に大きな影響を与えたと考えられる。『文学』における草野心平が得た中国文学の越境体験を研究することによって、草野心平の初期の文学世界と中国近代文学を結ぶ接点を明らかにすることができる。これは日本近代詩の歴史だけでなく、日中文学交流史においても大きな意味を持つと言える。従って、文学研究会広州分会の機関誌『文学』の発見とその考察は、文学研究会「広州分会」の実像解明に新たな光を当てるにとどまらず、『文学』についての文学史上の誤りを正すものであり、また文学研究会と草野心平の研究に対しても空白を埋める意義を有する。

そもそも、各地域で発行されていた文芸雑誌は、そこで活躍した作家たちや文学団体による文芸実践の記録であり、その地域の文化の一部分でもある。また、各地域の様々な文芸雑誌や新聞は、単に研究対象であるばかりでなく、一時期、一地域の社会・文化の様々な側面を認識しうる媒体でもある。ところが、地方で発行された文芸雑誌は発行部数が限られ、現在まで保存されているものが極めて少ないことも事実である。史料意識の深化に伴い、多

くの研究者が近代刊行物の蒐集と発掘を重視してきた。膨大な成果があげられたことによって、中国近代文学における文芸刊行物の研究は、一層進められてきた。しかしながら、やはり全国的に影響を与えた雑誌に偏向していることも否定できない。中央だけでなく、地方性を持つ各地域の文芸雑誌も中国近代文学史において非常に重要な意義を有する。各地域で刊行され、文化運動と社会革命の一環とみなされた近代文芸刊行物を研究対象とすることによって、それぞれの地方の文化や文学の近代化の様相をより明らかに呈示することができよう。

注

（一）例えば、Michel Hockx の論文「The Literary Association (*Wenxue yanjiuhui*、1920－1947) and the literary field of early Republican China」(The China Quarterly (153)1998 March)や、Susan Daruvala の著作 Zhou Zuoren and an alternative Chinese response to modernity (Harvard University Press、2000) などが欧米に、山田敬三氏の『小説月報』の『革新』と『半革新』―『文学研究会』結成過程」（吉田教授退官記念『中国文学語学論集』一九八五年）、倉橋幸彦氏の「文学研究会の成立と周作人」（『関西大学中国文学会紀要』十、一九八九年）などが日本における代表的研究として挙げられる。

（二）草野心平の中国留学時期の重要性について、深澤忠孝の「『青春の中心』・嶺南大学校文理科大学（2）―草野心平評伝ノート（3）」（『草野心平研究』三、一九九一年）、石崎等氏の「詩としてのアジア：草野心平と中国」（『日本文学』九十一号、二〇〇三年）、池上貞子氏の「草野心平と中国：嶺南大学時代」（『跡見学園女子大学文学部紀要』三十八号、二〇〇五年）などがある。

（三）筆者は、二〇一一年六月十八日九州産業大学で開催された日本比較文学会第七十三回全国大会にて、『混血』詩人草野心平の誕生―中国嶺南大学時代における文学活動をめぐって」を口頭発表。

（四）原文は「我們発起這個会，有三種意思，要請大家注意。一，是連絡感情。……二，是増進知識。……三，是建立著作工会的基礎。」

（五）張瑞龍「詩人梁宗岱」（『新文学史料』第三期、一九八二年）。

（六）この年譜は二頁で、梁宗岱の手書きである。七月派詩人でかつ学者である彭燕郊氏により公開。実物は未見、陳太勝著『梁宗岱与中国象徴主義詩学』（北京師範大学出版社、二〇〇四年）参照。

（七）劉思慕「『野菊集』後記」（『野菊集』、上海文芸出版社、一九八四年）参照。

（八）『越華報』に関する箇所は次の通り。「一九二六年七月二十七日創刊。社址広州第七甫，編輯兼発行人陳住亭」。（『広州市誌』、広州出版社、一九九九年）参照。

（九）『広州市誌』によれば、『越華報』は「一九三一年報紙銷數已達三萬餘份，創廣州商辦報紙的空前記録」とある。

（一〇）舒乙「文学研究会和它的会員―記念文学研究会成立七十周年」『中国現代文学研究叢刊』（第二期、一九九二年）参照。一九八八年四月、元文学研究会会員顧一樵氏は六十年余りにわたって保存してきた、一九二四年印刷の「文学研究会会員録」を作家冰心氏に寄贈。後に、冰心氏がそれを現代文学館に寄贈し、中国現代文学館の館長である舒乙氏によって最終的に公開に至った。

（一一）『最新支那要人伝』（朝日新聞社、一九四一年）一六六頁参照。

（一二）易新農、夏和順著『叶啓芳伝―従教堂孤児到大学教授』（中山大学出版社、二〇〇七年）十八から二九頁まで参照。

（一三）劉燧元「従教堂孤児到大学教授」、但し引用は易新農、夏和順著『叶

啓芳伝―従教堂孤児到大学教授』に拠る。

（一四）「広州私立嶺南大学歴年畢業学生一覧表（一九一八―一九三四）」と『嶺南大学年鑑（一九二四年度）』（一九二五年出版）は、中山大学図書館校史展示資料室に収蔵される資料である。

（一五）一八二七年創刊の『広州記録報』、一八三一年創刊の『広州雑誌』、一八三二年創刊の『中国叢報』、一八三五年創刊の『広州報』など英文の新聞が広州で出版された。「清末至中華人民共和国成立前夕的報業」（『広州市誌』）参照。

（一六）例えば、学生運動に注目する『新学生』（一九二〇年二月創刊）、政治と経済を重視する『広東群報』（一九二〇年十月創刊）等がある。

（一七）エッセイの「梁宗岱のこと」や「嶺南大学の思ひ出」（『支那点々』一九三九年、三和書房）や「日本と中国とにまたがって」（『詩とは何か』一九六九年、角川書店）、自伝小説の「動乱」（『新潮』一九六一年四月号）などがある。

（一八）『『空と電柱Ⅱ』編輯後記」（自筆謄写版詩集『空と電柱Ⅱ』、一九二四年三月空と電柱詩社）参照。

（一九）李瑞明編『嶺南大学文献目録―広州嶺南大学歴史檔案資料』（嶺南大学文学与翻訳研究中心、二〇〇〇年）十九頁参照。

（附記）

本稿は中国教育部「国家建設高水平大学公派研究生プロジェクト」の助成金による研究成果の一部である。